愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査

報 告 書

JICA LIBRARY
1209165 [8]

平成16年3月

独立行政法人国際協力機構 中部国際センター
（ＪＩＣＡ中部）

中部セ
ＪＲ
03-04

1209165 [8]

序　文

ＪＩＣＡは「市民参加」の国際協力を新たな柱に加え、平成１５年１０月新たにスタートしました。国際理解教育･開発教育は、その重要な業務です。

戦後、日本そして世界の発展とともに歩んできたＪＩＣＡの歴史を遡りますと、今年はちょうど 50 年です。この歴史の中で変わらない点は「人を通じた協力」です。「なぜ日本は発展したのか」と問われると、ＪＩＣＡは「それは人づくりから始まった」と答えます。「世界から貧困を半減する」を共通目標として２１世紀はスタートしました。その具体的な取組みの一つは「教育」です。

国際協力は「国際理解教育･開発教育から始まる」という人がいます。未だ共通理解に至っていませんが、その思いには賛成です。「一人一人が地域社会に、そして地球社会に役に立つ人を目指す」こんな「人づくり」が大切ではないでしょうか。

中部地域は「多文化共生」をあるべき姿とし、また国際理解教育･開発教育においても、行政・国際交流団体・大学・NGO／ＮＰＯ・市民グループが活動しています。ＪＩＣＡ中部は、地域の資源（ＪＯＣＶ、専門家、シニアボランティア経験者等）の協力をえて「国際協力出前講座」を行っています。伝え方教室や出前講座研究会を設けています。このため、出前先である教育現場のニーズを知る必要があります。ニーズにあった協力、相手とのパートナーシップの大切さは、国際協力を通じ学んでいます。これが本調査の始まるきっかけでした。

そして、山中座長他委員の先生方には、仕事を終えた後、あるいは休日を割いてのご協力をいただきました。意見の違い、共通点を発見する議論は、国際理解教育・開発教育の重要性や可能性や汎用性を共有するプロセスでもありました。完成したアンケート用紙に、多数の現場の先生から情熱あふれるご回答をいただけたことには感動しました。教育委員会や校長会の先生方のご理解ご協力に深く感謝申し上げます。現場の先生の様々な取組み、アイデアや工夫を伺いながら、委員一同は大変励まされました。これは新たな決意を生み出す源泉に繋がりました。

最後に、本報告書は「提言・アクションプラン」を作成しています。ご回答いただいた先生方へ感謝と決意の表明です。

ご協力大変ありがとうございました。

平成 16 年３月

ＪＩＣＡ中部 所長　荻原　久義

目　次

Ⅰ．要　約 ―― 1

Ⅱ．調査研究の概要 ―― 3

1．調査研究の趣旨 ―― 3
2．研究会の概要 ―― 4

Ⅲ．調査研究の結果 ―― 7

1．国際理解教育・開発教育とは ―― 7
2．国際理解教育・開発教育が推進されることの意義 ―― 7
3．アンケート調査結果からわかったこと ―― 8
4．学校において「人類共通の課題を扱う教育」に取り組んだことによる成果 ―― 11
5．まとめ ―― 15

Ⅳ．提言とアクションプラン ―― 16

1．国際理解教育・開発教育の推進に関する提言 ―― 17
2．わたしたちのアクションプラン ―― 21

Ⅴ．資料１：アンケート調査結果 ―― 23

Ⅵ．資料２：研究会記録 ―― 113

Ⅶ．資料３：国際理解教育 開発教育のリソース ―― 161

1．要　約

相互に複雑に関わりながら存在する現代の世界。世界や地域が抱える問題も複雑に関係しあい、その解決はなかなか一筋縄ではいかないようです。「戦争と限界（資源の有限性）の世紀」といわれた２０世紀が終わり、２１世紀こそは「環境と人権の世紀」に！といわれながら、世界は未だ解決されていない問題に新たな今日的課題が加わり、依然混沌としています。

複雑に相互に依存しあうグローバル化の進む世界において、持続可能な開発や平和を実現するためには、自ら学び、学び合い、違いを受け入れ、問題を共に解決していくことのできる力を一人ひとりの人間が持つことと、そのための学びの機会が多様に用意されていることが重要であると私たちは考えます。

人類共通の課題理解とその解決に向けた力を育む教育である国際理解教育・開発教育がめざすところは、少なからず学校教育における総合的な学習が目指すものと共通します。

私たち国際理解教育・開発教育推進者は、上記の理由から、国際理解教育・開発教育が教育現場で広く推進されることの意義と必要性を強く感じています。現在教育現場で国際理解教育・開発教育がどのように理解され、どのように取り組まれているのか、またはとりくまれていないのか、その実態を把握し、現状を分析し、国際理解教育・開発教育がそのねらいを達成される方法を提案するため、この調査研究を行うことにしました。

調査研究は、独立行政法人国際協力機構中部国際センター（ＪＩＣＡ中部）の事業として実施され、国際理解教育・開発教育の推進者である学校教諭、関係NGO／NPO、研究者、行政国際交流機関、ＪＩＣＡ職員を委員とする研究会を設置し、国際理解教育・開発教育の現状・課題やニーズについて、委員の経験と能力と持ち味を最大限に活かされるよう、すべて「参加型」で行いました。

調査研究の対象は、愛知県における小、中、高等、盲・聾・養護学校の国際理解教育・開発教育の現状・課題やニーズとし、先述の研究会委員を主として愛知県での国際理解教育・開発教育の推進者としたほか、愛知県内のすべての小、中、高等、盲・聾・養護学校に対して、アンケート調査を行い、実態の把握に努めました。

研究会委員の経験やアンケート調査等を通して整理された、国際理解教育・開発教育を推進する上での主な課題や効果は、次のとおりです。

- 国際理解教育も開発教育も、その教育内容として理解されていることは、本来の内容とのギャップがあり、従来の「国際理解」＝文化理解・交流・語学の範疇であることが多い。
- 「国際」の視点での取り組みは多いが、地球の視点で地域を見直したり、地域と地球の課題のつながりを理解するところまで踏み込まれることは少ない。
- 「人類共通の課題を扱う教育」として取り組まれている切り口は、１）身近なもの　２）話題性のあるもの　３）情報の入りやすいものが多く、それらは社会科の範疇であることが多い。

- 本来の国際理解教育・開発教育の内容を扱う、気づきを行動へつなぐところまで言及した取り組みにいかない理由として、現場の時間的制約、内容理解の不足、情報の不足、研修の機会の不足、変化への抵抗、担当になった教員の担当教科に左右される、などがあげられた。
- 学校現場からの国際理解教育・開発教育の外部協力依頼に対する声は多いが、期待されることは、ノウハウよりも、単発ですぐに使える手軽なものという傾向が強い。
- 実際に国際理解教育・開発教育に取り組んだ教員が、取り組みの成果としてあげた「学習者の変化」は、まさに「生きる力」の向上そのものであった。また多くの教員が、生きる力の向上は、主体的に学ぶ力向上にもつながったと感じている。

これらの課題と効果を踏まえ、今後の国際理解教育・開発教育のあり方に関する５つの提言と、今後提言の実現のために行う「私たちのアクションプラン」を策定しました。

＜提言＞ １．人類共通の課題に取り組む教育へのシフトを
～ 足もとから実践する国際理解教育・開発教育の可能性 ～
２．国際理解教育・開発教育は生きる力を育みます
～ 生きる力を育てることが教育の本質 ～
３．参加型学習ノススメ
～ 一人ひとりが学びの主役 ～
４．地域でつくる！教師も学ぶ！
～「地域で活動する団体・個人との協働や活用」は学びを広げてつなぐ ～
５．長期的・継続的取り組みが変化を生む
～系統立ったカリキュラムとしての国際理解教育・開発教育を～

＜私たちのアクションプラン＞ ～実践者は提案者　提案者は実践者～

(1) 愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究会を継続し、情報発信します
(2) 国際理解教育・開発教育実践者間のネットワークを充実し、積極的に情報発信します
(3) 学年やテーマ別の継続的系統的カリキュラムづくりに取り組み、学校へ情報発信します
(4) 国際理解教育・開発教育カリキュラム開発における教師との協働の場をつくります
(5) 国際理解教育・開発教育に関する教員対象研修プログラムを充実します
(6) 国際理解教育・開発教育の成果を積極的に共有し、情報発信します

これらの提言等の詳細は、以降の報告にあります。報告を読んで頂き、国際理解教育・開発教育の推進の参考にしていただければ幸いです、そして一緒になって国際理解教育・開発教育を推進していきましょう。

最後となりましたが、本調査研究にご協力いただきましたみなさまに、心からお礼申し上げます。

２００４年３月

愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究会

座長　山中 令子

II. 調査研究の概要

1. 調査研究の趣旨

(1) 背　景

「自ら学び、自ら考える力の育成」「学び方や調べ方を身に付ける」などを具体的なねらいに、知識を教え込む授業ではなく、自ら課題を設けて行う学習や将来の生き方を考える学習として、平成 14 年度より小学校、中学校の現場で総合学習が開始され、15 年度には高等学校の現場においても総合学習が開始されました。

総合学習は、環境、福祉、情報、国際理解など、各学校の裁量によってテーマ設定ができ、従来の教科枠、時間枠にとらわれない学習として位置付けられています。この取り組みが始まる前から、裁量に任されているぶん、何についてどのように取り組むべきか、現場での模索は続き、現在もその状況に大きな変化はないと察します。しかしながら、総合学習のねらいと、国際理解教育・開発教育のねらいがかなりな部分で一致していることから、国際理解教育・開発教育への関心は以前に比べて増してきました。関心の高まりだけではなく、実際に教育現場からの国際理解教育・開発教育へのアプローチ（例えば、教員自身が国際理解教育・開発教育の理念の手法を身につける、または外部のリソース＝ＪＩＣＡ、NGO／ＮＰＯ、国際交流協会等自治体、大学等を利用する。）も始まっています。しかし、国際理解教育・開発教育の扱うテーマの多様さゆえに、国際理解教育・開発教育への学校や先生一人ひとりの捉え方には差がある現状です。

(2) 目　的

本調査研究は、国際理解教育・開発教育が持つ一人ひとりの人間開発に対する可能性と有用性を理解し、自ら実践推進しようとする研究会メンバーにより、愛知県における小・中・高等・養護学校の国際理解教育・開発教育の現状・課題を整理し、外部リソースに対しどのようなニーズがあるかなどアンケートを通して明らかにし、当該地域における国際理解教育・開発教育のあり方や実践・推進に向けた今後の方向性について提言することを目的とします。

(3) 調査研究の内容

愛知県の愛知県における小、中、高等、盲・聾・養護学校における国際理解教育・開発教育を対象に、次の点について調査研究を行いました。

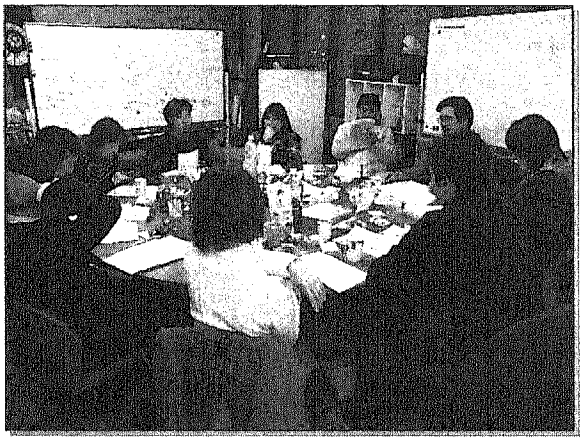
- 国際理解教育・開発教育の取組状況と課題
- 国際理解教育・開発教育を実践することの意義と効果
- 外部リソース及び教員研修に対するニーズと課題
- 今後の国際理解教育・開発教育の実践への提言とアクションプラン

2．研究会の概要

(1) 構　成

研究会は、名古屋市を拠点に、国際理解教育を実践・推進している（特活）ＮＩＥＤ・国際理解教育センター代表の山中令子氏を座長に、愛知県内の小、中、高等、養護学校それぞれの教諭、開発教育・国際協力を推進する（特活）名古屋ＮＧＯセンターの職員、国際理解教育・開発教育をテーマに研究している大学の研究者、行政関連組織の職員、ＪＩＣＡ中部の職員で構成しました。

また、国際交流協会の職員がオブザーバーとして参加しました。アンケート調査や研究会運営補助は、特活）ＮＩＥＤ・国際理解教育センターに委託し実施しました。



▲ 研究会の様子

愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究会

委　員	今津 孝次郎	名古屋大学大学院 教育発達科学研究科
	荻原 久義	ＪＩＣＡ中部
	久世 治靖	名古屋市立宮根小学校教諭
	栗木 梨衣	愛・地球博ボランティアセンター
	里村 京子	愛知県立港養護学校教諭、ＩＣＡＮ、ＥＩＵＰ、青年海外協力隊ＯＧ
	瀬尾 さとみ［前半］	(特活)名古屋ＮＧＯセンター、(財)名古屋ＹＷＣＡ
	田中 千賀子	光ヶ丘女子高等学校教諭
	野田 真里	中部大学 国際関係学部国際関係学科 (特活)名古屋ＮＧＯセンター
	濱田 泰輔	名古屋市立若葉中学校教諭
	村山 佳江［後半］	(特活)名古屋ＮＧＯセンター
［座長］	山中 令子	(特活)ＮＩＥＤ・国際理解教育センター
オブザーバー	加藤 哲士	(財)愛知県国際交流協会
	林 恵理子	(財)名古屋国際センター
事務局	礒貝 白日	ＪＩＣＡ中部
	藤原 久道	ＪＩＣＡ名古屋市国際協力推進員
	川合 眞二	(特活)ＮＩＥＤ・国際理解教育センター

(2) 全体の流れと進め方

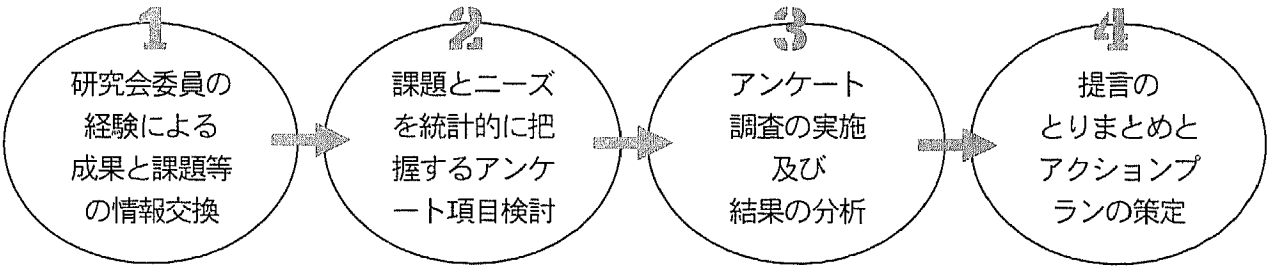
研究会では、国際理解教育・開発教育の定義を確認したうえで、様々な立場から国際理解教育・開発教育を推進している各委員の経験から感じている国際理解教育・開発教育を推進することのメリットとしての成果や課題、あるいはデメリットなど、多様な視点から情報交換しました。

次に、情報交換の結果から言えることやわかることを整理するとともに、それらを裏付けるためや足りない情報、知りたい情報についてのアンケート調査項目の洗い出しを行い、その中から限られたアンケート票の中で特に聞きたい項目の抽出を行いました。

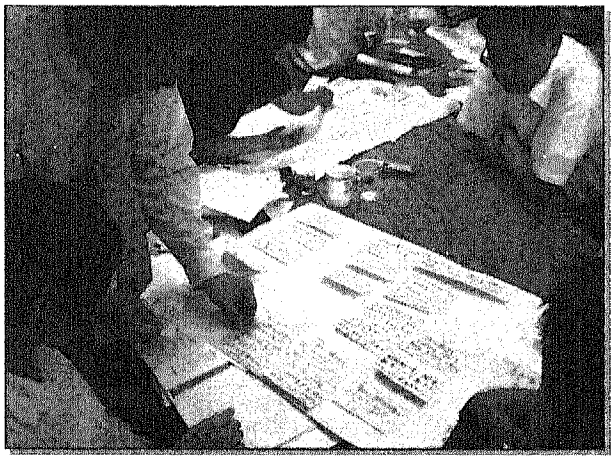
それらの項目をアンケート調査票にまとめ、愛知県内のすべての小、中、高等、盲・聾・養護学校に送付するとともに、回収したアンケートの集計・分析を行いました。

最後に、研究会委員の経験とアンケート調査の分析結果を踏まえて、今後の国際理解教育・開発教育の推進に向けた提言と、提案者が実践者になるという決意を込めて、「私たちのアクションプラン」を策定しました。

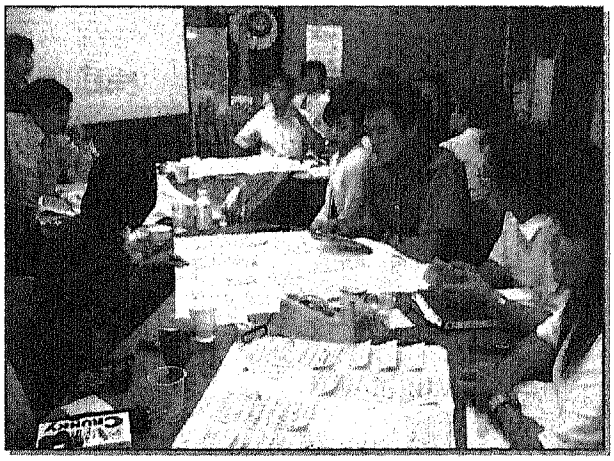
なお、調査研究結果の概要を、愛知県高等学校国際教育研究協議会の研究大会、「国際理解教育セミナー　ｉｎなごや２００４」で配布、発表しました。



また、研究会は、事務局がたたき台を用意して意見を述べ合う方式ではなく、アンケート票の作成から提言まで、すべて一から委員で話し合い作成するとともに、進め方も参加型＝ワークショップ方式を採用し、一人ひとりの意見を大切にしながら、建設的な議論と合意形成を図りながら行いました。



▲ カードを分類整理する様子



▲ 発表・全体共有の様子

(3) 各回の概要

研究会は９回行い、その各回の概要は次表のとおりです。

研究会の開催概要

回	日　時	場　所	内　容
1	7月　8日(火) 18:30～20:30	なごやボランティア ・NPOセンター	・主催者あいさつ ・趣旨・スケジュールの確認、共有 ・研究会メンバー・スタッフ自己紹介
2	7月27日(日) 13:25～17:30	JICA中部	・国際理解教育・開発教育の定義の確認 ・同教育が地域や教育現場で推進される意義 ・委員が持つ情報の交換 ・アンケート調査のねらいと対象
3	8月28日(木) 18:30～20:30	NIED・国際理解 教育センター	・前回までの到達点の共有（新規が多かった） ・アンケート調査のねらいを達成するための 設問の洗い出し
4	9月18日(木) 18:45～21:00	NIED・ 国際理解教育センター	・アンケート設問の検討と優先順位付け
5	10月21日(火) 18:45～22:00	NIED・ 国際理解教育センター	・アンケート調査の基本的事項の決定 ・アンケート票の最終検討 ・今後のスケジュールの確認
6	1月　9日(金) 18:00～21:30	NIED・ 国際理解教育センター	・アンケートの単純集計結果を読み解き ・「人類共通の課題を扱う教育」を授業で取り 組んでみて良かったことや成果のまとめ
7	1月30日(金) 18:00～21:30	NIED・ 国際理解教育センター	・提言のポイントと基本的枠組みの検討 ・各委員の提言アイディアの共有 ・今後の提言とりまとめ方法の検討
8	2月11日(祝) 13:00～21:30	NIED・ 国際理解教育センター	・各委員の提言の検討ととりまとめ
9	3月　8日(月) 18:00～20:30	NIED・ 国際理解教育センター	・報告書（案）の確認

III. 調査研究の結果

1. 国際理解教育・開発教育とは

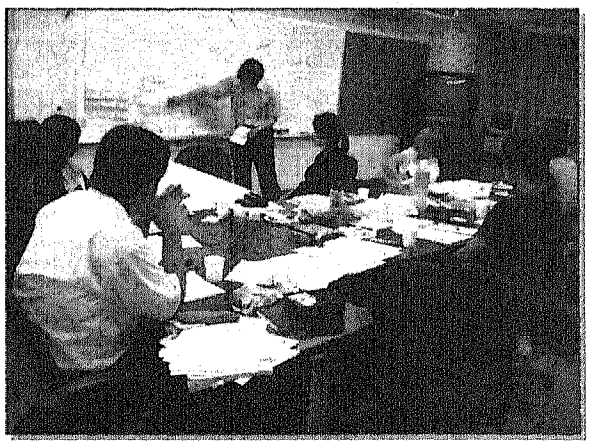
国際理解教育も開発教育も、人権、環境、平和、異文化理解、開発など、地域や世界に共通する課題（すなわち人類共通の課題）を扱い、知り、考え、行動する主体を育む教育です。育てたい力は、それらの課題を解決していくために、自分たちの暮らす社会や地球に心を込めて手を入れていく力。具体的には自分や他者を大切にする力（自尊・セルフエスティーム）、コミュニケーションの力、協力しあう力などです。

これまでの日本の学校教育の中では、国際理解＝異文化理解、国際交流、英語教育として捉えられていることが多いようですが、本来は上の定義まで踏み込んで力を育んでいくことがねらいです。

2. 国際理解教育・開発教育が推進されることの意義

研究会委員が自らの経験で感じている国際理解教育・開発教育が推進されることの意義は、次のとおりです。

- 一人ひとりが学びの主役となることができる／学びが広がる
- 多様なところで起きている問題・課題に気付き、考えて行動することができるようになる
- 地球の資源を再評価することができる
- 自分も地球の一員であること（地球市民）、自分と地域と世界がつながっていることに気付く
- 自己理解・他者理解が進み「多文化共生」のまちづくりを実現できる
- 共感が育ち、「違い」を受け入れるようになる／違いから学び合えるようになる
- よりよい人間関係／助け合いが生まれる
- 理論的思考力・調査分析力・課題解決力・コミュニケーション力、アドボカシー力が身につく
- 生きること／学ぶことは楽しいことだと知るようになる



3．アンケート調査結果からわかったこと

(1) 調査の概要

調査の概要は次のとおりです。

＜調査対象＞

・愛知県内の全ての小学校、中学校、高等学校、盲・聾・養護学校

（ＪＩＣＡ中部が把握している個別教員＝自由記入欄の意見を反映）

＜調査方法＞

・郵送法

＜調査期間＞

・名古屋市を除く学校

発　　送：１１月１４日

回収〆切：１１月３０日

最終〆切：１２月１５日

・名古屋市の学校

発　　送：１２月　３日

回収〆切：１２月１９日

最終〆切：　１月　６日

＜回収率＞

・発送数 1,675 通

・回収数（全て有効回答）755 通

・回収率　45.1 ％

(2) 集計結果からわかったこと

単純集計及び学校区分別のクロス集計結果からわかったことは次のとおりです。なお、一部研究会委員の意見も含まれます。

- 国際理解教育の方が開発教育より認知度が高い（表１、２）。
- 国際理解教育及び開発教育の内容理解は、研究会が考える国際理解教育の内容との間にギャップがある（表３）。
- 総合学習における国際理解教育として取り組まれているものは、従来の日本型国際理解教育（異文化理解／国際交流／語学習得）の範ちゅうで行われていることが多い（表４）。
- 国際理解教育への取り組み内容は、学んだ結果から課題解決につなぐというより、概念理解の段階までのものが多いのではないか（委員意見）。
- 基礎学力と総合学習のねらいを比べて、強いて言えばどちらが大切かの質問には、「基礎学力」と応えた教員の方が多い（表５）。
- 総合学習は、概ねねらいにあった学習ができていると答えた割合が多い（表６）。
- 「人類共通の課題を扱う教育（国際理解教育・開発教育）」として取り組む切り口は、身近なもの、話題性のあるもの、情報が入りやすいもの（戦争、平和、環境、福祉、異文化交流）である（表７）。

◎ 「人類共通の課題を扱う教育」に取り組む障害は、「時間がない」、「教材や情報がない」、「講師招聘や予算措置などの問題」と考えられている（表８）。

◎ 「人類共通の課題を扱う教育」取り組む障害のもう一つは、単発の授業形態が多く、テーマがつながり展開していくものになっていないことにあるのではないか（外部サポートの利用実態より委員意見）。

◎ 「人類共通の課題を扱う教育」に関する協力を外部に依頼する時に期待することは、ノウハウよりもすぐに使えるもの（外部講師／ビジュアル教材／そのまま使えるプログラム／訪問）（表９）。

＜集計表＞

（記号説明　Ｔ：担当教員回答、Ｓ：学校全体回答、ＳＡ：単数回答、ＭＡ：複数回答）
なお、各選択肢の値の計は無回答が含まれていないため、「全体」や「合計」と一致しません。

★表１　国際理解教育の認知度（Ｔ／ＳＡ）

上段：回答数 下段：割合％	全体	よく知っている	だいたい知っている	言葉は聞いたことがある	全く知らない
合計	755	87	566	90	2
	100.0	11.5	75.0	11.9	0.3
小学校	458	65	360	28	0
	100.0	14.2	78.6	6.1	0.0
中学校	183	16	143	20	1
	100.0	8.7	78.3	10.9	0.5
高等学校	86	4	49	30	1
	100.0	4.7	56.9	34.9	1.2
盲・聾・養護学校	19	1	9	9	0
	100.0	5.3	47.3	47.4	0.0

★表２　開発教育の認知度（Ｔ／ＳＡ）

上段：回答数 下段：割合％	全体	よく知っている	だいたい知っている	言葉は聞いたことがある	全く知らない
合計	755	4	75	318	347
	100.0	0.5	9.9	42.1	46.0
小学校	458	1	34	198	219
	100.0	0.2	7.4	43.2	47.9
中学校	183	1	23	81	76
	100.0	0.5	12.6	44.3	41.5
高等学校	86	2	14	29	38
	100.0	2.3	16.3	33.7	44.2
盲・聾・養護学校	19	0	3	6	10
	100.0	0.0	15.8	31.6	52.6

★表３　国際理解教育の内容理解（Ｔ／ＭＡ）

上段：回答数 下段：割合％	全体	外国語教育	異文化理解	国際交流	日本の伝統・文化	開発途上国の開発	南北問題	在住外国人との共生	人権・環境・平和など地球規模課題	地球規模の課題と自分とのつながり	様々な課題解決に向う主体の育成	その他
合計	755	572	744	716	608	206	192	495	470	348	175	10
	100.0	75.8	98.5	94.8	80.5	27.3	25.4	65.6	62.3	46.1	23.2	1.3
小学校	458	378	454	442	397	119	98	309	274	211	106	7
	100.0	82.5	99.1	96.5	86.7	26.0	21.4	67.5	59.8	46.1	23.1	1.5
中学校	183	127	183	173	137	63	59	124	127	91	46	3
	100.0	69.4	100.0	94.5	74.9	34.4	32.2	67.8	69.4	49.7	25.1	1.6
高等学校	86	50	82	78	54	20	32	50	59	39	20	0
	100.0	58.1	95.3	90.7	62.8	23.3	37.2	58.1	68.6	45.3	23.3	0.0
盲・聾・養護学校	19	12	16	18	12	1	1	6	7	5	2	0
	100.0	63.2	84.2	94.7	63.2	5.3	5.3	31.6	36.8	26.3	10.5	0.0

★表４　総合学習における国際理解教育で取り組むテーマ（Ｓ／ＭＡ）

上段：回答数 下段：割合％	全体	外国語学習	異文化理解	国際交流	日本の伝統・文化	在住外国人との共生	貧困や南北問題	人権・環境・平和	その他
合計	755	397	407	266	210	70	37	118	11
	100.0	67.9	69.6	45.5	35.9	12.0	6.3	20.2	1.9
小学校	458	346	280	186	162	51	12	68	6
	100.0	84.4	68.3	45.4	39.5	12.4	2.9	16.6	1.5
中学校	183	35	93	57	33	13	18	35	4
	100.0	27.8	73.8	45.2	26.2	10.3	14.3	27.8	3.2
高等学校	86	8	23	15	7	5	7	13	0
	100.0	27.6	79.3	51.7	24.1	17.2	24.1	44.8	0.0
盲・聾・養護学校	19	4	8	4	3	0	0	1	1
	100.0	33.3	66.7	33.3	25.0	0.0	0.0	8.3	8.3

★表5 基礎学力と総合学習のねらいとする力、どちらが大切か（T／SA）

上段：回答数 下段：割合％	全体	総合学習のねらいとする力	どちらかといえば総合学習力	どちらかといえば基礎学力	基礎学力	わからない	その他
合計	755 100.0	70 9.3	156 20.7	326 43.1	128 17.0	16 2.1	49 6.5
小学校	458 100.0	48 10.5	96 21.0	209 45.6	64 14.0	7 1.5	29 6.3
中学校	183 100.0	12 6.6	32 17.5	78 42.6	43 23.5	7 3.8	11 6.0
高等学校	86 100.0	6 7.0	18 20.9	28 32.6	21 24.4	1 1.2	7 8.1
盲・聾・養護学校	19 100.0	2 10.5	8 42.1	7 36.8	0 0.0	1 5.3	1 5.3

★表6 総合学習のねらいの実践度（S／MA）

上段：回答数 下段：割合％	全体	かなり実践できている	だいたい実践できている	あまり実践できていない	ほとんど実践できていない	わからない	その他
合計	755 100.0	65 8.6	489 64.6	159 21.1	3 0.4	11 1.5	17 2.3
小学校	458 100.0	46 10.0	326 71.2	77 16.8	1 0.2	3 0.7	2 0.4
中学校	183 100.0	16 8.7	104 56.8	55 30.1	0 0.0	4 2.2	4 2.2
高等学校	86 100.0	3 3.5	41 47.7	19 22.1	2 2.3	2 2.3	11 12.8
盲・聾・養護学校	19 100.0	0 0.0	10 52.7	7 36.8	0 0.0	2 10.5	0 0.0

★表7 「人類共通の課題を扱う教育（国際理解教育・開発教育）」の授業での実施状況（S／MA）

上段：回答数 下段：割合％	全体	戦争・平和	貧困・飢餓	人口問題	南北問題	国際協力	人権・人種差別	女性の地位・性差別	福祉・障害者・高齢者	子どもの権利・児童労働	識字・教育	医療・保健
合計	755 100.0	588 77.9	375 49.7	310 41.1	257 34.0	481 63.7	526 69.7	273 36.2	657 87.0	253 33.5	112 14.8	290 38.4
小学校	458 100.0	348 76.0	192 41.9	133 29.0	88 19.2	280 61.1	312 68.1	124 27.1	408 89.1	112 24.5	45 9.8	160 34.9
中学校	183 100.0	150 82.0	118 64.5	110 60.1	105 57.4	126 68.9	138 75.4	90 49.2	168 91.8	87 47.5	48 26.2	83 45.4
高等学校	86 100.0	72 83.7	56 65.1	59 68.6	56 65.1	63 73.3	62 72.1	52 60.5	63 73.3	45 52.3	15 17.4	38 44.2
盲・聾・養護学校	19 100.0	12 63.2	6 31.6	5 26.3	5 26.3	7 36.8	10 52.6	4 21.1	12 63.2	6 31.6	2 10.5	5 26.3

上段：回答数 下段：割合％	難民	在住外国人との共生	フェアトレード（公正貿易）	地球環境の悪化	種の絶滅・生態系の破壊	ごみ・廃棄物・循環型社会	国際交流	異文化理解	まちづくり・ボランティア	セルフエスティーム（自己肯定感）	コミュニケーション能力	その他
合計	219 29.0	214 28.3	118 15.6	577 76.4	268 35.5	629 83.3	550 72.8	533 70.6	410 54.3	124 16.4	410 54.3	18 2.4
小学校	95 20.7	121 26.4	46 10.0	356 77.7	139 30.3	407 88.9	350 76.4	333 72.7	241 52.6	76 16.6	261 57.0	13 2.8
中学校	76 41.5	59 32.2	44 24.0	146 79.8	77 42.1	143 78.1	135 73.8	133 72.7	124 67.8	33 18.0	102 55.7	3 1.6
高等学校	43 50.0	29 33.7	28 32.6	64 74.4	45 52.3	57 66.3	53 61.6	49 57.0	36 41.9	12 14.0	34 39.5	1 1.2
盲・聾・養護学校	3 15.8	4 21.1	0 0.0	7 36.8	5 26.3	17 89.5	8 42.1	14 73.7	5 26.3	2 10.5	10 52.6	1 5.3

★表８ 「人類共通の課題を扱う教育」に関する授業を進める上での課題（T／MA）

上段：回答数 下段：割合％	全体	教材が足りない	授業を行う時間がない	準備をする時間がない	自分が学習・研修する時間がない	上司や同僚の理解がない	情報が少ない	学ぶ側に興味がない
合計	755	280	122	392	364	17	198	36
	100.0	37.1	16.2	51.9	48.2	2.3	26.2	4.8
小学校	458	194	57	241	232	9	138	10
	100.0	42.4	12.4	52.6	50.7	2.0	30.1	2.2
中学校	183	60	41	104	92	6	42	13
	100.0	32.8	22.4	56.8	50.3	3.3	23.0	7.1
高等学校	86	16	18	39	29	2	9	12
	100.0	18.6	20.9	45.3	33.7	2.3	10.5	14.0
盲・聾・養護学校	19	8	5	5	6	0	7	1
	100.0	42.1	26.3	26.3	31.6	0.0	36.8	5.3

上段：回答数 下段：割合％	予算措置がない	十分な施設・設備がない	各分野に詳しい教員がいない	学校図書館に関連図書が少ない	講師招聘が難しい	自分自身に関心がない	その他
合計	129	124	138	231	123	4	27
	17.1	16.4	18.3	30.6	16.3	0.5	3.6
小学校	69	72	86	172	84	2	15
	15.1	15.7	18.8	37.6	18.3	0.4	3.3
中学校	26	40	37	41	29	2	8
	14.2	21.9	20.2	22.4	15.8	1.1	4.4
高等学校	23	10	11	9	5	0	3
	26.7	11.6	12.8	10.5	5.8	0.0	3.5
盲・聾・養護学校	10	1	3	7	4	0	1
	52.6	5.3	15.8	36.8	21.1	0.0	5.3

★表９ 具体的にあるとよい情報（T／MA）

上段：回答数 下段：割合％	全体	各テーマ・各国の最新事情	授業実践例	視聴覚教材（ビデオ・写真等）	指導法・教授法	各種文献・統計データ	イベント・セミナー研修情報	講師の紹介情報	関連団体の紹介情報	その他	特に必要はない
合計	755	278	408	464	168	75	45	337	115	1	10
	100.0	36.8	54.0	61.5	22.3	9.9	6.0	44.6	15.2	0.1	1.3
小学校	458	180	265	295	108	42	19	218	67	0	1
	100.0	39.3	57.9	64.4	23.6	9.2	4.1	47.6	14.6	0.0	0.2
中学校	183	63	98	107	42	21	18	76	36	0	3
	100.0	34.4	53.6	58.5	23.0	11.5	9.8	41.5	19.7	0.0	1.6
高等学校	86	29	35	45	14	10	5	28	11	1	5
	100.0	33.7	40.7	52.3	16.3	11.6	5.8	32.6	12.8	1.2	5.8
盲・聾・養護学校	19	5	8	12	3	2	3	12	1	0	1
	100.0	26.3	42.1	63.2	15.8	10.5	15.8	63.2	5.3	0.0	5.3

4．学校において「人類共通の課題を扱う教育」に取り組んだことによる成果

「人類共通の課題を扱う教育」に取り組んだことによる成果を、実際に取り組んだ教員が自由に書いたものを、研究会委員が読み解き整理したものを以下に示しました。

- 小学校　小学生にとっての成果（小学校教員が考える）、小学校教員にとっての成果
- 中学校　中学生にとっての成果（中学校教員が考える）、中学校教員教員にとっての成果
- 高等学校　高校生にとっての成果（高等学校教員が考える）、高等学校教員にとっての成果
- 盲・聾・養護学校　盲・聾・養護学校生にとっての成果（盲・聾・養護学校教員が考える）
  盲・聾・養護学校教員にとっての成果
- 保護者にとっての成果
- 地域にとっての成果

● 小学生にとっての成果（小学校教員が考える）

★主体的な意欲態度が育まれる★

- 課題を追求するようになる
- 意欲的に学習に取り組む姿勢の向上
- 考える力が深まった
- 視野が広がる→認識が改まる→意欲が高まる→行動に移る
- 自分達ができることについて考えるようになる
- 自分の生活をふりかえり改善しようとする意欲の高まり
- 自分たちが平和な社会を作ろういう意識を持つ
- 課題を解決しようという意欲の高まり
- 自主的な活動をするようになる

★セルフエスティーム（自尊）の高まり★

- 自分に自信が持てるようになる
- 人権尊重の気持が育つ
- 互いの考えを尊重できる
- やさしい気持、豊かな心が育つ
- 自らの生き方について考えるようになる、または考えるきっかけになる

★物の見方の広がり★

- 興味関心が広がる
- ＴＶニュースや新聞記事等への興味が増す
- 知識が広がる
- 地球規模の考え方ができる
- 身の回りへの関心が増す

★多様なものを受け入れる力の向上★

- 障害者のことを理解しようとする
- 外国籍の子どもへの理解と交流ができる
- 異文化に対する興味と関心が増す
- 外国人も同じ人間であるという意識
- 共生の考え方が身につく

★コミュニケーション能力の向上★

- 話す事、聴くことに対する抵抗がなくなる
- 積極的に意見が交換できる
- まとめ方、調べ方、発表の仕方が身につき、他教科でも役立つ
- プレゼンテーション能力が育つ

★自分と課題とのつながりへの気付き★

- 平和のありがたさを知る
- 自分の国のよさに気付く
- 幸せを実感
- 自分と他とがつながっていることを知る
- 自分にもできることがある！という気付き

★実感★

- 楽しさの体感、満足感、達成感

★気付きから行動へ★

- 地域に関わるようになる
- 地球に優しい生活に心掛けるようになる

● 小学校教員にとっての成果

★自らの学び気付きの実感★

- 自分を振り返る機会になった
- テーマに関する関心が高まった
- 視野が広がり意識や価値観に変化があった
- 達成感があった
- こどもの意志決定が大切だという気付き

★期待感や熱意の深まり★

- 将来この取り組みは社会に対してよい影響をもたらすという期待
- 長い目で見てじっくり取り組む姿勢が育った
- 熱意が持てるようになる
- こどもに対する理解が進む
- こどもと一緒に考えることができた充実感
- こどもと共に学ぶことの新鮮さを感じる

★目に見えるメリット★

- 資格が上がった
- ネットワークが広がった

● 中学生にとっての成果（中学校教員が考える）

★他者受容の態度育成★

- 相手の立場を考える
- 異文化を理解する
- 他者への思いやり向上
- 優しい気持が生まれる
- 外国人に対する姿勢の変化
- 人間を理解しようとする態度
- 人間関係が良好に変化する
- 生きる力が身につく

★気付き★

- 自分と他者との違いに気付く
- 大きな課題から身の回りの小さな課題とのつながりに気付く
- 環境問題が身近な事として認識される

★考えや能力意欲の深まりや高まり★

- 身近なことに置き換えて考えられる
- 国際社会の中での日本について考えられる
- 人権意識が向上
- 人間の生き方・共生について考える
- 課題を具体的に捉えられる
- おとなとのコミュニケーション能力の向上（交渉・連絡など）

★実感／感動★

- 地域に生きているという実感が持てる
- 実話は個々の心にしみて残る
- 発見感動がある
- 学ぶことを楽しむことができる

★興味関心の高まり★

- 外国人とのコミュニケーションに対する興味関心の向上
- 周囲に関心を持ち、積極的に関わるようになる
- ボランティア意識の高まり
- 人類共通の課題に目を向けるようになる
- 説得力のある経験談による関心の高まり身の回りへの関心が増す

★行動へのつながり★

- 自分の生活を見直す
- 自分のできることを考える
- 調べ学習に生き生きと取り組む
- 人から学ぶという姿勢が育つ
- 継続して学習に取り組む気持が育まれる

★視野の広がり★

- 国際感覚が身につく
- 地球規模へ視野が広がる
- 知識が広がる
- 専門の講師から専門の情報が得られた
- 生の情報を得られた
- 自国の伝統文化の再発見

● 中学校教員にとっての成果

★気付き発見★

- 国際理解は人権意識を高めることと気付いた
- 自分自身の課題意識が向上した
- 自分自身知らないことが多い事の再認識
- 大きな枠でくくるのではなく、身近なところから取り組むべきだと気付いた

★生徒と教師の共働の相乗効果★

- 生徒ともに追求活動することで、生徒の関心も高まると同時に自分の関心も高まった
- 自分の生徒をあらためて見つけ直す機会となった
- 生徒と一緒に考えながら進められた満足感と感動

★達成感と充実感★

- バランスよく指導できた
- 準備に苦労した分自信が持てた
- スキルを習得した
- 学年学校全体で取り組み回を重ねる毎に内容が深まっていく
- 他の教員への好影響という期待

● 高校生にとっての成果（高等学校教員が考える）

★興味関心／思考の深まり★

- 自国の理解が深まる
- 平和に対する考え
- 自分の生き方を考える
- 社会正義への認識の深まり
- 現代社会に対する関心の向上
- 多様なものへの興味関心の向上
- 問題意識を持つようになる
- 地域や自分自身について考えるようになった

★能力の向上★

- 自発性／主体性の向上（発言をしなかった生徒が発言をするようになる）
- 自分たちの問題としてとらえられるようになる
- 主体的に取り組む姿勢が育った
- 「学ぶ姿勢」の向上
- 探究心の向上
- 社会的判断力
- コミュニケーション能力の向上

★行動へのつながり★

- 自発的活動へ
- 国際協力の具体的行動へつながる（ネパール小学校建設）

● 高等学校教員にとっての成果

★期待感の高まり★

- 生徒の変化から未来へ希望を持てるようになった＝未来は明るい
- どんなレベルの生徒でも実施できることがわかった
- 生徒の反応がよい

★教員間の連携促進★

- 他教員からの協力が得られる機会となった
- 教員間のコミュニケーションが活性化された

★情報量・技術のアップ★

- 情報が増えた
- ノウハウが増えた
- 自分の生徒をあらためて見つけ直す機会となった

● 盲・聾・養護学校生にとっての成果（盲・聾・養護学校教員が考える）

- 異文化理解が進む
- 課題解決方法／調べ方／学び方についての理解向上
- 情報発信能力向上

● 盲・聾・養護学校教員にとっての成果

- 外部講師の存在とその有効性
- 授業設計の新しい方向性（実体験を取り入れることの効果）
- 総合学習と基礎学力は相互に関係しており、総合を進めることは基礎学力を向上させる糸口と気付く

● 保護者にとっての成果

- 人権について意識が高まった
- 学校をこえて親を巻き込むことができた

● 地域にとっての成果

- 地域とのつながりができたり、また深まったりした
- 地域の人を巻き込むことができ交流が深まった
- 地域のリソースを活かしあうことができた

5．まとめ

研究会委員の経験やアンケート調査等を通して、提言につなげるための国際理解教育・開発教育を推進する上での主な課題や効果を次のようにまとめます。

- 国際理解教育も開発教育も、その教育内容として理解されていることは、本来の内容とのギャップがあることがわかった。その中でも国際理解教育として取り組まれていることは、従来型国際理解、すなわち文化理解、交流、語学の習得という範疇であることが多い。

- 「国際」という視点での取り組みは多いが、グローバルとローカルのつながり（地球の視点で地域を見直す、地域と地球の課題のつながりを理解する）までは踏み込まれることは少ない。

- 「人類共通の課題を扱う教育」として取り組まれている切り口としては、1）身近なもの、2）アップ・トゥ・デイト（話題性のある）なもの、3）情報が入りやすいもの（例えば、戦争、平和、環境、福祉、異文化交流）、などで、これらは社会科の中で多く扱われている。

- 従来型の国際理解の範疇から出ない、または問題の所在発見や原因のつながり及び問題同士の相互依存性にまで言及した取り組みにいかないのは、以下のような現場の状況が理由であると考えられている。
  - ・時間がない
  - ・人類共通の課題を扱う教育についてよく知らない
  - ・情報がない
  - ・人類共通の課題を扱う教育に関する教員研修やセミナーの機会が少ない
  - ・従来のやり方を変えたくない、または、変えるのが大変　など

- 国際理解教育・開発教育に関する協力を、外部に依頼したいという意向を持つ現場は多い。その場合の外部協力に対する教員の期待は、ノウハウよりもすぐに使えるもの（外部講師派遣・マニュアル付きビジュアル教材・そのまま使える既成プログラム・団体訪問など）をという傾向が強い。

- 実際に国際理解教育・開発教育に取り組んだ教員は、実に多くの「学習者の変化」を成果としてあげている。自尊感情の高まり、異なる他者や異文化の受容と共感、、コミュニケーション伝える・聴く・考える）能力の向上、主体性の発揮、協力する姿勢の現れ、興味関心の広がりと深まり、自分と他者・世界とのつながりの実感、問題発見能力向上、課題解決活動への自発的参加　などなど。

- 特筆すべきは、学びの主人公であるこどもたちの上記のような「生きる力」を育むことが、「主体的に学ぶ力」をも育むことにつながった、と多くの教員が感じていること。

Ⅳ. 提言とアクションプラン

1. 国際理解教育・開発教育の推進に関する提言

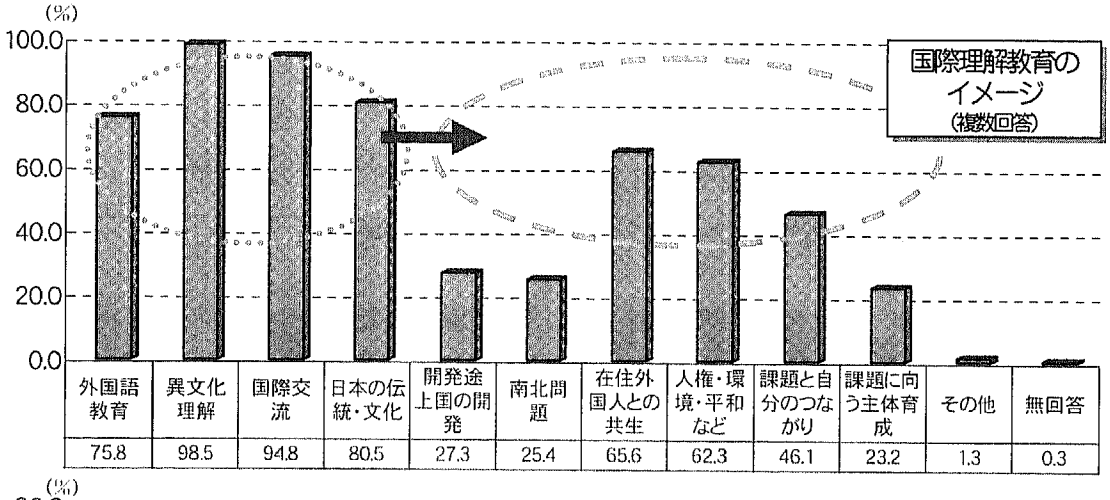
提言1

人類共通の課題に取り組む教育へのシフトを

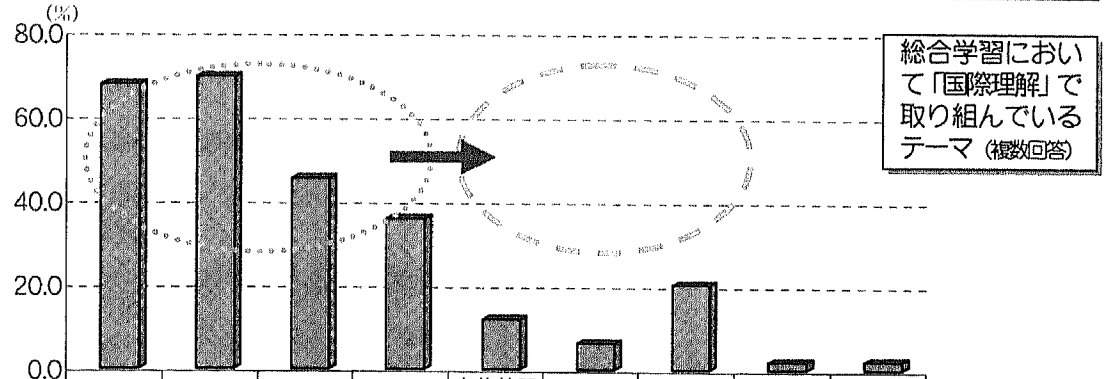
～足もとから実践する国際理解教育・開発教育の可能性～

グローバル化が進む中で、私たちの日々の生活はいよいよ世界とは無縁ではなく、世界で起こる出来事は私たちの生活に直結しています。人権、環境、開発、平和といった今日の世界が抱える様々な問題は、その国だけで起こっていることではなく、相互に複雑に他国や他の問題とつながって存在しています。人類共通の課題は、地球規模で考えていかなければ解決は困難だということです。

国際理解教育・開発教育は、「外国文化理解」「国際交流」「外国語習得」だけではなく、自分たちの生活とのつながりの中で人類共通の課題を考え、解決する主体を育む教育だという認識へのシフトが必要だと考えます。



外国語教育	異文化理解	国際交流	日本の伝統・文化	開発途上国の開発	南北問題	在住外国人との共生	人権・環境・平和など	課題と自分のつながり	課題に向う主体育成	その他	無回答
75.8	98.5	94.8	80.5	27.3	25.4	65.6	62.3	46.1	23.2	1.3	0.3



外国語学習	異文化理解	国際交流	日本の伝統・文化	在住外国人との共生	貧困や南北問題	人権・環境・平和	その他	無回答
67.9	69.6	45.5	35.9	12.0	6.3	20.2	1.9	2.1

提言2

国際理解教育・開発教育は生きる力を育みます

～生きる力を育てることが教育の本質～

いじめ、不登校、青少年の犯罪増加など、現在日本の教育現場が抱える問題は深刻です。背景には、現代社会が複雑になり自分と社会とのつながりが見えにくい、または、人と人との関わりが希薄になってきた、など、子どもたちを取り巻く環境の変化が大きく影響していると考えられます。

国際理解教育・開発教育に取り組んでいる教員が「取り組みの成果」として実感している「子どもの変化」をみると、国際理解教育・開発教育がこれらの問題の一つの解決策となり、子どもたちに現代社会の中でよりよく生きていく力を与えることがわかります。

国際理解教育・開発教育は生きる力を育む教育です。

小中高等学校の教員が評価した、「生きる力」につながる子どもたちの変化

- 多様なものへの興味関心が高まった
- 自分の生活を振り返り、改善しようとする意欲が高まった
- 自らの生き方や共生について考えるようになった
- 自分とは異なる他者への共感、思いやりの気持ちが育った
- 周囲に関心を持ち、積極的に関わることができるようになった
- 自分と他（自分と他者、自分と地域、自分と世界）がつながっていることを知るようになった
- 課題を自らのこととして捉えられるようになった
- 共通の課題に目を向け、地球規模の考え方ができるようになった
- 社会的正義に対する意識が高まった
- 自分たちにできることについて考えるようになる
- 自主的にコミュニティに関わるようになった
- 話す・聴く能力と態度が向上し良好な人間関係を築くことにつながった
- 学ぶことを楽しむようになり、継続的な学びに取り組む気持ちが育った

p.11「学校において「人類共通の課題を扱う教育」に取り組んだことによる成果」参照

提言3

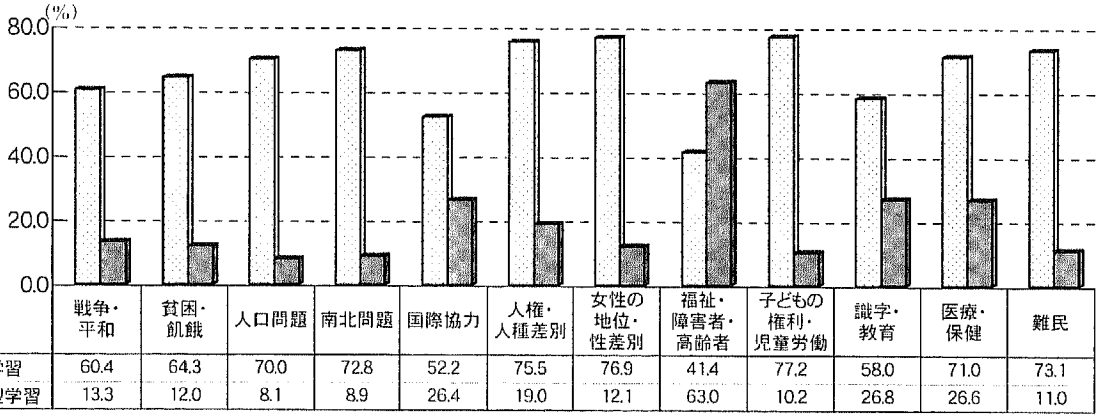
参加型学習ノススメ

～一人ひとりが学びの主役～

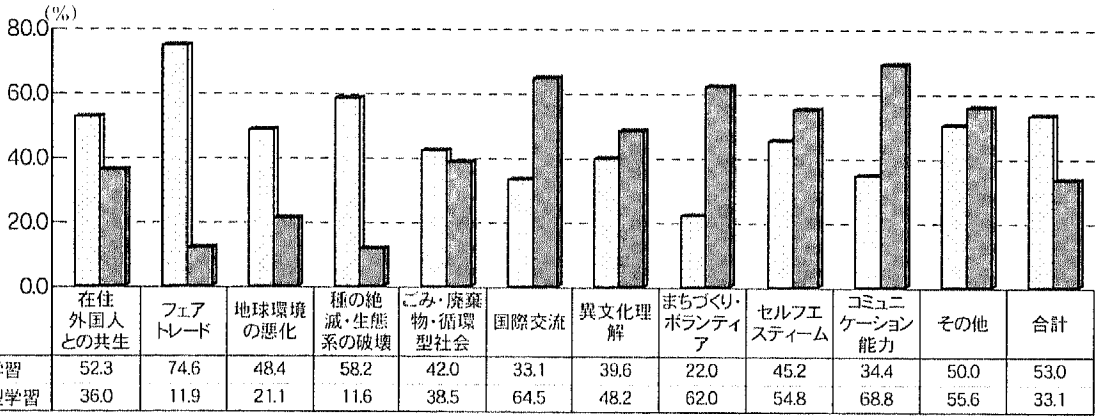
学校教育が目指すのと同様に、国際理解教育・開発教育も、主体的に学び、課題を追求し、課題解決のために行動する意欲や態度を育むことをねらいとしています。そのために大切にしているのは「参加型学習」という学びのプロセスです。「体験したことをふりかえる」→「対話形式でお互いから学びあい気づきを共有する」→「そこから発見したことを実生活に活かす方法を見つけ実行につなげる」、というプロセスを大切にした学び方です。

国際理解教育・開発教育は、コミュニケーションの力、問題を発見する力、分析する力、合意形成の力、協力や課題解決への意欲と技術などを培い、一人ひとりを学びの主役にする教育なのです。

「人類共通の課題」の授業の学習方法（複数回答）



	戦争・平和	貧困・飢餓	人口問題	南北問題	国際協力	人権・人種差別	女性の地位・性差別	福祉・障害者・高齢者	子どもの権利・児童労働	識字・教育	医療・保健	難民
□講義学習	60.4	64.3	70.0	72.8	52.2	75.5	76.9	41.4	77.2	58.0	71.0	73.1
▩参加型学習	13.3	12.0	8.1	8.9	26.4	19.0	12.1	63.0	10.2	26.8	26.6	11.0



	在住外国人との共生	フェアトレード	地球環境の悪化	種の絶滅・生態系の破壊	ごみ・廃棄物・循環型社会	国際交流	異文化理解	まちづくり・ボランティア	セルフエスティーム	コミュニケーション能力	その他	合計
□講義学習	52.3	74.6	48.4	58.2	42.0	33.1	39.6	22.0	45.2	34.4	50.0	53.0
▩参加型学習	36.0	11.9	21.1	11.6	38.5	64.5	48.2	62.0	54.8	68.8	55.6	33.1

注：「人類共通の課題」に係るテーマごとに選択肢は「講義学習」、「調べ学習」、「校外学習」、「参加型学習」、「その他」として調査した。このうち講義学習と参加型学習のみをピックアップして表示している。

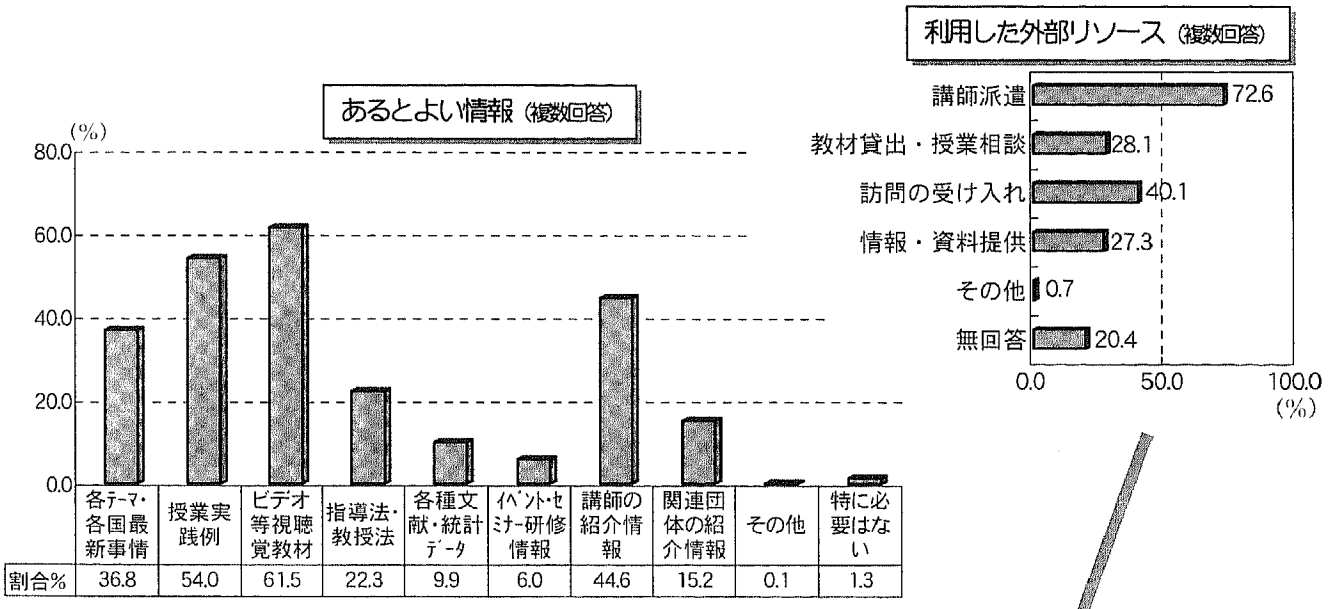
提言4

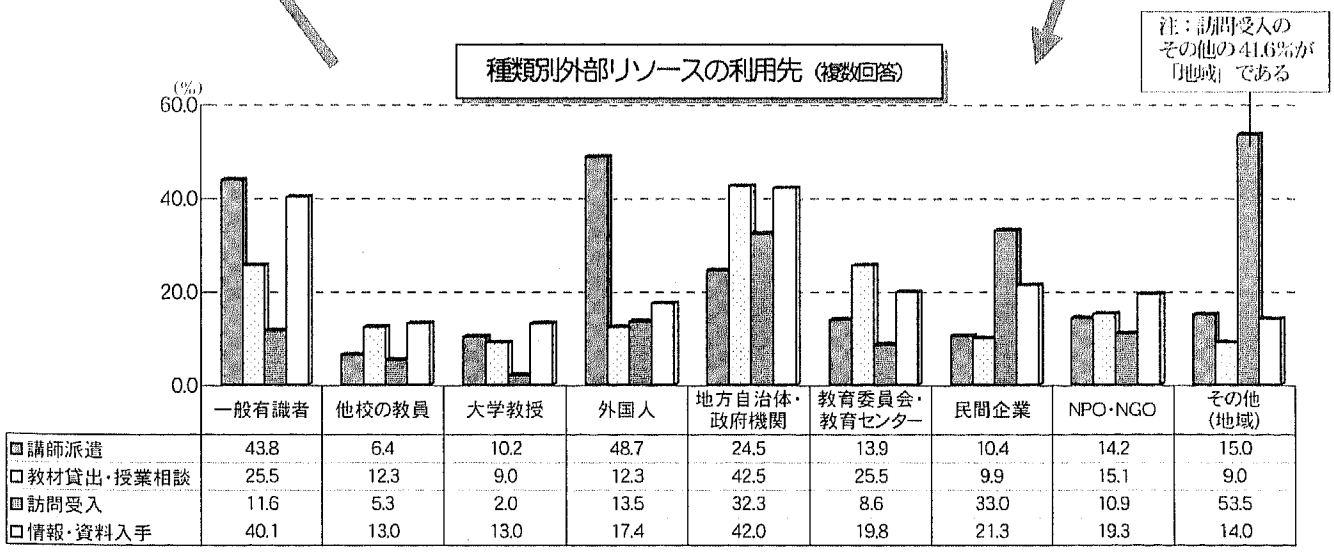
地域でつくる！教師も学ぶ！

～「地域で活動する団体・個人との協働や活用」は学びを広げてつなぐ～

アンケートの結果から、国際理解教育・開発教育の実践は、地域の協力を得て行われているケースが多いことがわかります。その理由は、国際理解教育・開発教育が扱うテーマはまさに地域社会の課題でもあり、それらの課題に地域で取り組んでいる団体や個人（外部リソース）から学ぶところがたくさんあるからに他なりません。

外部リソースを、「すぐに使える手軽な道具を提供してくれるもの」と考えるより、協働し学びあうことで、教員自身が「いつまでも使え応用の効くノウハウを自らも手に入れることができるもの」と考えて活用してみてはどうでしょう。





提言5

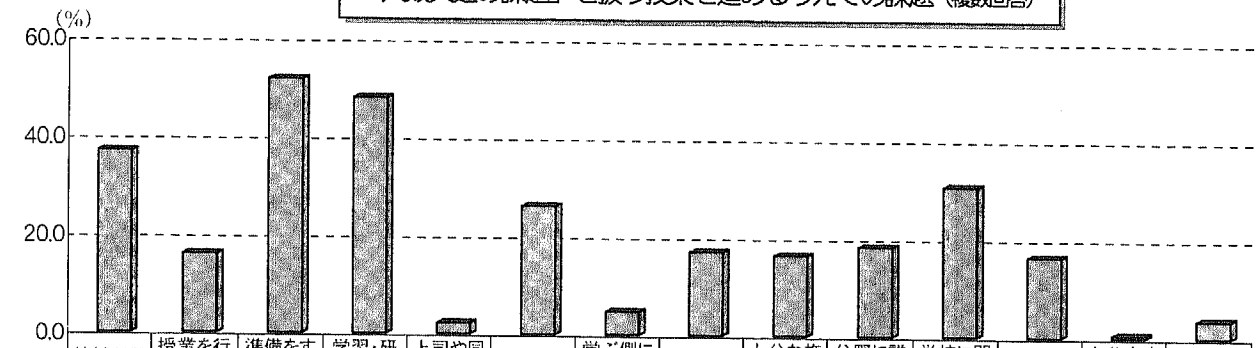
長期的・継続的取り組みが変化を生む

～系統立ったカリキュラムとしての国際理解教育・開発教育を～

今回実施した教育現場へのアンケートから見えてきた課題の一つは、「価値観を育て、態度や行動する力を培うための教育には、長期的視野に立った、継続的取り組みが必要である」、ということです。今回のアンケートで、「生きる力」を育むことが評価された国際理解教育・開発教育ですが、学校内部で取り組む場合も、外部リソースと協働する場合も、継続的・計画的なカリキュラムがあって初めてその効果が得られると考えます。

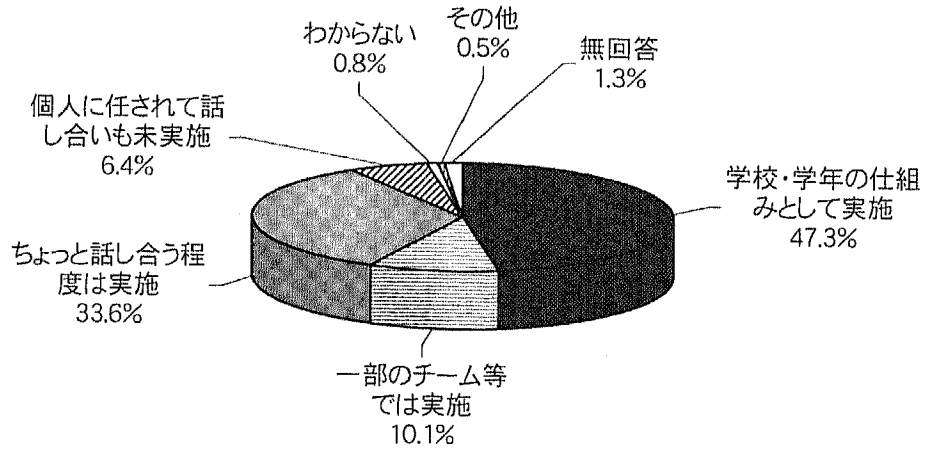
「生きる力」を育み「自ら学ぶ力」が育つことを上位目標とし、継続的系統的カリキュラムとして国際理解教育・開発教育に取り組むことと、その成果をみんなで共有していくことを提案します。

「人類共通の課題」を扱う授業を進めるうえでの課題（複数回答）

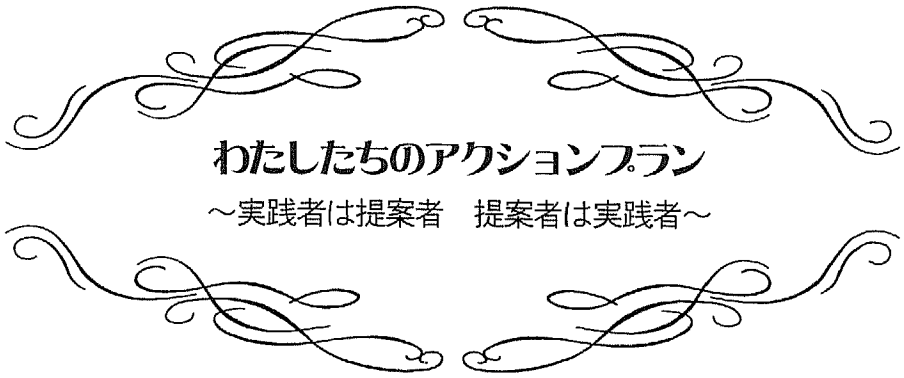


	教材が足りない	授業を行う時間がない	準備をする時間がない	学習・研修する時間がない	上司や同僚の理解がない	情報が少ない	学ぶ側に興味がない	予算措置がない	十分な施設・設備がない	分野に詳しい教員がいない	学校に関連図書が少ない	講師招聘が難しい	自分自身に関心がない	その他
割合%	37.1	16.2	51.9	48.2	2.3	26.2	4.8	17.1	16.4	18.3	30.6	16.3	0.5	3.6

総合学習の評価・改善の取り組み状況（単数回答）



2．わたしたちのアクションプラン



教員、ＮＧＯ／NPO、行政などの国際理解教育・開発教育実践者１０名が集まり実施してきましたこの研究会。現場のニーズを把握するためのアンケートを作り、結果をまとめ、国際理解教育・開発教育が推進されるための提言をまとめるために活動してきました。

最後に、私たちこそが今後も学び続けるためのアクションプランです。

- 愛知県における国際理解教育・開発教育ニーズ調査研究会を継続し、情報発信します
- 国際理解教育・開発教育実践者間のネットワークを充実し、積極的に情報発信します
- 学年やテーマ別の継続的系統的カリキュラムづくりに取り組み、学校へ情報発信します
- 国際理解教育・開発教育カリキュラム開発における教師との協働の場をつくります
- 国際理解教育・開発教育に関する教員対象研修プログラムを充実します
- 国際理解教育・開発教育の成果を積極的に共有し、情報発信します